慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス文学と漢文学との出会い（その三）：李白とフランス〔1〕
Sub Title	Contact acec les lettres chinoises (III) : Li T'ai-po en France〔1〕
Author	森, 英樹(Mori, Hideki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2000
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.31 (2000.) ,p.76- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20000000-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

——フランス文学と漢文学との出会い（その三）——

李白とフランス〔1〕

森　英樹

第一章

[1] デルヴェが唐詩仏訳に用いた底本

デルヴェ・ド・サン・ドニ（d'Hervey de Saint-Denys, 1823-1892）が1862年に刊行した『唐代詩集』（*Poésie de l'époque des Thang*）は、ヨーロッパにおける最初の本格的な中国古典詩の欧文（フランス語）訳である。ヨーロッパ人の中国に対する関心は十八世紀までは、主としてその統治制度や政治・宗教の思想や形態にあった。とりわけ儒教の経書などが研究や翻訳の対象であった。すなわち十九世紀に至るまでヨーロッパの知識人たちは、中国の詩歌文学については比較的多数が訳された『詩経』中の詩をのぞいては、きわめて断片的かつ粗笨なかたちでしか触れることができなかった。このことをわたくしは本紀要29号の前半において述べた。

さらにわたくしは29号後半及び30号において、唐代にいたるまでの中国詩の歴史と詩法を、これもまたヨーロッパにおいてはじめて詳述したと言ってよいこの『唐代詩集』の序文を紹介した。その際わたくしは19世紀当時の著者によるきわめて不規則なローマ字注音で示された漢字をすべて相当する原漢字に還元し、また引用されたすべての詩句の原詩を探索してその漢文を並記し、かつこの序文に若干の批判・訂正を加えたのであった。

さてその序文につづく本書の中心部分である唐詩アンソロジーには、唐代

詩人35名の作品97首がきわめて端正なフランス語に翻訳されている。そして毎首にヨーロッパの読者に必要と思われる著者自身の注を付し、かつ主要な詩人についてはその略伝も付している。

このアンソロジーの底本として用いられたものがいかなる書であったかは、すでに前号において簡単に紹介しておいた。すなわち序文の末尾に明記されている以下の4書である。

1° *Thang chi ho kiaï, édition impériale, grand in-4° en douze livres* : Pé-king, 1726.

2° *Thang chi ho suèn tsiang kiaï, format in-12, en douze livres*, édition récente.

3° *Li-taï-pé ouen tsi* (*œuvres de Li-taï-pé, cum notis variorum*), *dix livres*.

4° *Thou-fou tsioen tsi tsiang tchou* (*œuvres complètes de Thou-fou avec gloses et commentaires*), *dix livres*.

1°は清の王堯衢撰の『唐詩合解十二巻』であると思われる。わたくしは国内にこの書を所蔵するところを知ることができなかった。ただこれが後に『古唐詩合解』の名で古詩の注釈と合冊して重刻されていることを知った。すなわち王堯衢の原本に清の王翼雲が古詩4巻を付録して箋注したものである。わたくしが閲覧した版本（東洋文庫所蔵）の見返しには、「王阮亭先生原本、呉郡王翼雲先生註、重訂唐詩合解箋注」の題扉がある。とすれば“王堯衢”とはつまり“王阮亭”、すなわち清初に一代の詩宗と仰がれた王士禎（王漁洋）に他ならぬのである。

またこの縦字タイトルの上段に横字左並びに「光緒丙子孟秋重刊」の文字がみえる。光緒丙子は1876年であるから――デルヴェのアンソロジー刊行の十余年の後であるから――かれが底本としたのがこの刊本でなかったことは明らかである。

しかしいずれにしてもデルヴェが底本にしたという『唐詩合解』原本の内

容は、この『古唐詩合解』によって窺うことができるのである。わたくしはたまたま《*Encyclopædia Britannica*》（→1962年版）の「Li Po」の項目の執筆者が、参考書目の欄にこの『古唐詩合解』の名を掲げているのを見出した。それには「Ku T'ang Shih Ho Chüeh, Wang Yuenting, 1732」とある。もしこの記述が信頼できるとすれば、『古唐詩合解』なるものは王翼雲重訂版よりすでに144年前の清の雍正10年に刊行されていたことになる（→『古唐詩合解』はさらに1891年に上海の掃葉山房から再刊されている）。

2°は清の劉文蔚編撰の『唐詩合選詳解十二巻』であると思われる。わたくしはこの書もまた未見である。宋の謝疊山に『唐詩合選』なるものがあるらしく、劉文蔚の編撰になる詳解十二巻は、この謝疊山の原本に注解を付したものではなかろうか？　書誌上の詳細について斯学のご教示を乞いたいと思う。しかしこの『唐詩合選詳解』は、これもまた近年あらたに重刻されていることが分かった。すなわち楊業栄新注『唐詩合選』（広西人民出版社、1988年）である。わたくしはこの再刊本の目録のみを入手することができた。簡体字によるこの刊本の目録によれば、唐代詩人90家、詩368首を収め、毎首に解題・注釈を付している。

3°は“《李太白文集》諸注付10巻”と読める。しかし『李太白文集』の名を冠した十巻の版本がどこに存在したのであろうか？　李白作品集で十巻のものといえば、明張含選の『李詩選十巻』及び明の正徳十四年陸元太刻本『李翰林集十巻』があるようだが（→『李白資料彙編』）、デルヴェの底本がそのいずれか、あるいはそのいずれでもないかは不明である。あるいはこれは清の王琦の『李太白文集三十六巻』そのものであろうか？　王琦本は乾隆24年（1759年）に上梓されたものであるから、デルヴェの目に触れることは十分に可能であった。しかしその仏訳アンソロジーに付したデルヴェ自身の訳注を見ると、これがただちに王琦の注を手もとに置いて書いたものとは断定しがたい。またデルヴェの略述による李白伝を読むと、かれが王琦本に目を通したという推定がいっそう困難になる。ではこの《李太白文集10巻》とは、いったい何者の撰注による版本であったのだろうか？

4°は《杜甫全集詳注10巻》と読める。これもまた何者の撰したものかは

不明である。似たようなタイトルの仇兆鰲の『杜詩詳註』は20巻とあるからこれでもなさそうである。これらの版本の詳細についてもわたくしはどなたかの教示を待つのみである。(→デルヴェによれば上記4冊の底本は、いずれも当時の "Bibliothèque de la rue de Richelieu"、すなわち現在のフランス国立図書館旧館に所蔵されていたらしい)。

[2] 唐詩の選択について

デルヴェの唐詩仏訳アンソロジーには、およそ100編の作品が収録されている。作品の選択は当然、上に述べたような底本に添ってなされたことであろう。しかしそこにはさらに加えて、ヨーロッパの読者を意識したデルヴェ自身の選択がほどこされているはずである。かれはここにいかなる詩人を収録しているであろうか。またそれらの詩人のいかなる作品をいかなる割合で採用しているであろうか。その取捨にはなんらかの注目すべき独自性が見られるであろうか。これがまず興味を覚えるところである。なぜならアンソロジーにおける作品の選択と構成は、それ自体が一種の文学的営為であり，そこに編者の詩眼と識見がうかがわれる底の作業であるからだ。

唐代は言うまでもなく中国詩の開花期である。おびただしい数の詩人のおびただしい数の作品がまさに百花繚乱として咲き誇った時代である。唐代約300年にわたる期間には、『全唐詩』900巻に録する限りでも詩人数約2200、作品数48900余を数えると言われる。

そのうちデルヴェのアンソロジーに採択された詩人は35名、作品は97首であり、その内訳は以下のごとくである。

1 ; Li-taï-pé ;	李太白	24編	Li T'ai-po (Li po)
2 ; Thou-fou ;	杜甫	22編	Tou Fou (Tseu-mei)
3 ; Ouang-po ;	王勃	2編	Wang-Po
4 ; Yang-khiong	楊炯	2編	
5 ; Oey-tching	魏徵	1編	Wei Chêng
6 ; Tchin-tseu-ngan	陳子昂	2編	Tch'en Tseu-ngang

7 ; Lo-pin-ouang	駱賓王	1 編	Lo pin wang
8 ; Song-tchi-ouên	宋之問	1 編	Sun chih-wen
9 ; Kao-chi	高適	5 編	Kao Che
10 ; Ouang-oey	王維	4 編	Wang wei
11 ; Mong-kao-jèn	孟浩然	2 編	Mong Hao-jan
12 ; Tchang-kien	常建	3 編	Ch'ang Chien
13 ; Thao-han	陶翰	1 編	Wang Han
14 ; Oey-yng-voé	韋応物	1 編	Wei Ying-wou
15 ; Ouang-tchang-ling	王昌齡	2 編	Wang Tch'ang-ling
16 ; Tsin-tsan	岑参	2 編	Ts'en Chen
17 ; Tchang-tsi	張籍	1 編	Tchang Tsi
18 ; Pé-kiu-y	白居易	2 編	Po Kiu-yi (Lo-t'ien)
19 ; Li-chang-yn	李商隱	1 編	Li Chang-yin
20 ; Peï-y-tchi	裴夷直	1 編	
21 ; Tchang-jo-hou	張若虛	1 編	Tchang Jo-hiu
22 ; Tchu-ouan	蘇渙？	1 編	
23 ; Tsoui-hao	崔顥	2 編	Ts'ouei Hao
24 ; Tchang-sin	張巡	1 編	
25 ; Tchu-kouang-hi	儲光儀	2 編	
26 ; Thong-han-king	童翰卿	1 編	
27 ; Ouang-leng-jèn	？	1 編	
28 ; Li-y	李益	1 編	Li Yu
29 ; Tchang-oey	張謂	1 編	Chang Wei
30 ; Tsien-ki	銭起	1 編	Ts'ien k'i
31 ; Pe-lo-yé	？	1 編	
32 ; Tsoui-min-tong	崔敏童	1 編	
33 ; Han-ouo	韓愈	1 編	Han Yu
34 ; Kheng-tsin	元稹	1 編	Yuan chên
35 ; Taï-cho-lun	戴叔倫	1 編	

以上35名　97編　［右はPaul Demiéville その他による綴り］

まずここに現れた詩人の名を見たかぎりで判断され得ることを考えてみよう。これらの詩人を唐代4期の時期別に分けてみると、初唐約7名、盛唐約12名、中・晩唐約9名である。すなわち唐代全般にわたってほぼ均等な数であり、この点ではデルヴェの選択に注目すべき偏向はない（Tchu-ouan、Ouang-leng-jen及びPe-lo-yé については、これに相当する人名を確定することができなかった。従ってこの数に勘定されていない）。すなわちかれのアンソロジーは、時代的な展望という面ではきわめて公正である。

ただ初唐では沈佺期、杜審言が漏れている。沈佺期はサロン文学的な詩が流行した中宗朝に宗之問とともにもっとも活躍した詩人である。中唐では賈島、柳宗元、王建、それに李賀の名がみえない。李賀は20世紀に入ってキーツやボードレールとの比較が云々されることもある特異な詩人であるが、いまだデルヴェの注目の圏内には入っていなかったとみえる。晩唐では杜牧、崔魯、司空図、それに退廃的で艶麗な詩風で知られる温庭筠、韓偓らの名が見えない。こうしたことのほかにデルヴェの唐詩選択において注目すべきことが幾つかある。

1）沈佺期・柳宗元・李賀・杜牧などといった詩人たちが漏れている一方で珍しい詩人、たとえば『唐詩選』や『三体詩』にも見えない詩人が現れていることである。すなわち陶翰、裴夷直、蘇渙、童渙卿、Ouang-leng-jen、Pe-lo-yé の6名である。

ただしこのうちの陶翰は、かれが底本にした『唐詩合選詳解』にも「宿天竺寺」の一首が収められている。そしてかれが仏訳しているのも同じこの一首である。すなわちかれの選集に採用された35詩家のうち29名は、この『唐詩合選』に収録されているのである。

しかし『唐詩合選』にも含まれていない詩人が6名いる。それは裴夷直、蘇渙、童渙卿、崔敏童、それにOuang-leng-jen及びPe-lo-yé である。このうち崔敏童は、有名な「宴城東荘」が底本のいまひとつである『唐詩合解』のほうに収録されている。

従って裴夷直、童翰卿、蘇渙（もくしは蘇綰？）それにOuang-leng-jen及びPe-lo-yé の5名の詩人については、『合選』にも『合解』にも含まれていないのであるから、デルヴェの拠るべきものがまた別に存在したと考えなければならない。

裴夷直は『全唐詩第五百十三巻』に収める。デルヴェの仏訳した一首は、ヨーロッパの読者に親しみやすいように「Les mesures de jade」という意訳的タイトルを冠しているが、これはすなわち「亞夫砕玉斗」の一編である。童渙卿は『第六百七巻』にその作品をわずか二首収めるのみである。仏訳されているのは「La statue de la Tristesse céleste」のタイトルを付している。すなわちこの2首のうちの「昆明池織女石」である。蘇渙は『第百十三巻』に2首、もし蘇綰であれば『第百十三巻』に一首を収める。しかし仏訳されているのはそのいずれにも相当しない。

これら五名の詩人はいったい何によってデルヴェのアンソロジーに現れたのであろうか？　デルヴェが900巻にわたる『全唐詩』を通読して、そこに1首ないし2首のみしか収録しないこれらの詩人を拾いあげてきたとは考え難い。おそらく『合選』や『合解』のほかに何かの通行本の選集がかれの手もとにあったのであろう。それが何であったか、そしてまたわたくしがいまだに同定し得ていない“Ouang-leng-jen”及び“Pe-lo-yé”なる詩人が何者なのか、いまは疑問として残しておくしかない。

2）つぎに翻訳された作品の数を眺めて判断され得ることを考えてみよう。李白杜甫の作品数が圧倒的であるのは、およそ唐詩の選集類に共通の現象であろう。ただ注目されることの第二は、李白24首が杜甫22首を上回っていることである。すなわち、たとえば『唐詩選』における杜甫51首・李白33首という比率、あるいは『唐詩合選』における杜甫72首・李白44首などといった割合が、デルヴェのこのアンソロジーでは逆転していることである。

李白優位については、その理由がいくつか考えられる。1°まず中国の詩人というときに、ヨーロッパ人の念頭に第一に浮かぶのは李白であるだろう。放浪に明け暮れたその経歴と奔放な想像を駆使したその作品に触れれば、李

白こそ中国の詩人の代名詞的存在である。李白のロマン派的な詩人のイメージは、おそらく杜甫のそれよりも親しみやすいと思われる。2°それに加えて翻訳上の問題が考えられる。つまり杜甫の律詩のごとき厳密な律体の美は、欧文訳では構造的に表現不可能である。一方李白のシンメトリーを破った比較的自由な古体の形式は、翻訳体そのものにも詩的効果を移して盛り込みやすいと考えられる。3°さらにここには多分にデルヴェ自身の李白への個人的好みが反映しているのではなかろうか。

3）作品の選択で注目されることの第三は、高適に付せられた5首という比較的高い比重である。単純に統計的にいえば、これは『唐詩選』ないし『唐詩合選』における王維（あるいは岑参）を上回る比率である。

デルヴェは高適のいかなる作品を拾い上げているであろうか。かれが訳したその5首を同定してみると以下のごとくである。

「Le retour dans la montagne」→「賦得還山吟送沈四山人」（七古）
「Tristesse」→「宗中十首其一」（五古）
「Impressions d'un voyageur loin de son pays」→「東平路作三首其三」（五古）
「Au poète Thou-fou」→「人日寄杜二拾遺」（七古）
「A Tong-ta」→「別董大」（七絶）

「賦得還山吟送沈四山人」を除く残りの4首は、『合選詳解』に収録された高適9首のうちに含まれている。従って作品の選択が主として『合選詳解』に拠ったとしても、この採用数の多さには明らかにデルヴェ自身の個人的選択がはたらいている。その理由は何であろうか。デルヴェにはたとえば王維の淡々とした自然詩などよりも高適の昂揚した感懐詩のほうが、つまりよりエモーショナルな詩のほうがいっそう好みに投じたのであろうか。たしかに高適の慷慨には、李白にも相似た小気味よさと品格の爽やかさとがある。これがあるいはデルヴェの琴線に響いたのであろうか。

その他の詩人についてはすべて1首ないし2首が録されているにすぎない。以上の単純な統計上の事実から結論して、いちおう次のように言っておくことができる。すなわち、高適の場合を例外として、李白と杜甫をのぞいては格別にデルヴェの注目を引いた唐代詩人はいまだ存在しなかったと。

李杜の二大詩人を除いてとくに際立って好奇心をそそる詩人をまだ見出していなかったということ、これはおそらくデルヴェ自身にとってのみならず19世紀末までのヨーロッパの知識人にとっても同様な事情であったであろうと思われる。

[3] デルヴェが用いた辞書

ところでデルヴェは唐詩を翻訳しかつ訳注をほどこしていく過程で、いかなる辞書を用いたであろうか。序文のうちにはそれを示唆するような記事が見当たらない。しかしアンソロジーに付された訳注のなかに、以下の人名を散見することができる。これによってかれが用いた辞書を推察し得るのである。

すなわち李白の「Le retour des beaux jours」(→春日行)の訳注に“de Guignes” “Medhurst” “Morrison” の名を見ることができる(→136頁)。“de Guignes” の名はその後2度あらわれる(→274, 339頁)。杜甫の「秋興」の“笳”の訳注に“père Basile de Glemona” の名が瞥見される(→241頁)。“Bridgman” の名が2度見える(→143, 356頁)。

まず“de Guignes” であるが、これはフランスの中国・東洋学者であり、コレージュ・ド・フランスの教授であったギーニュ(Joseph de Guignes, 1721-1800)の息子ギーニュ(Joseph de Guignes fils, 1759-1845)であり、その辞書とは《*Dictionnaire chinois, français et latin*》である。広東に17年間在留したフランス領事であった小ギーニュは、ナポレオン一世の命によってこの中仏羅辞典の編纂にたずさわり、1813年にパリ帝国印刷局よりフォリオ版1千余頁の大型刊本として世に出した(→**図版1**)。

モリソンの蔵印が押されたこの東洋文庫所蔵の大型本を開くと、中表紙の次頁に「漢 HÁN 字 TSÉ 西 SȲ 譯 Ÿ」の縦書きタイトルを見ることができ

DICTIONNAIRE
CHINOIS,
FRANÇAIS ET LATIN,

PUBLIÉ

D'APRÈS L'ORDRE DE SA MAJESTÉ L'EMPEREUR ET ROI

NAPOLÉON LE GRAND;

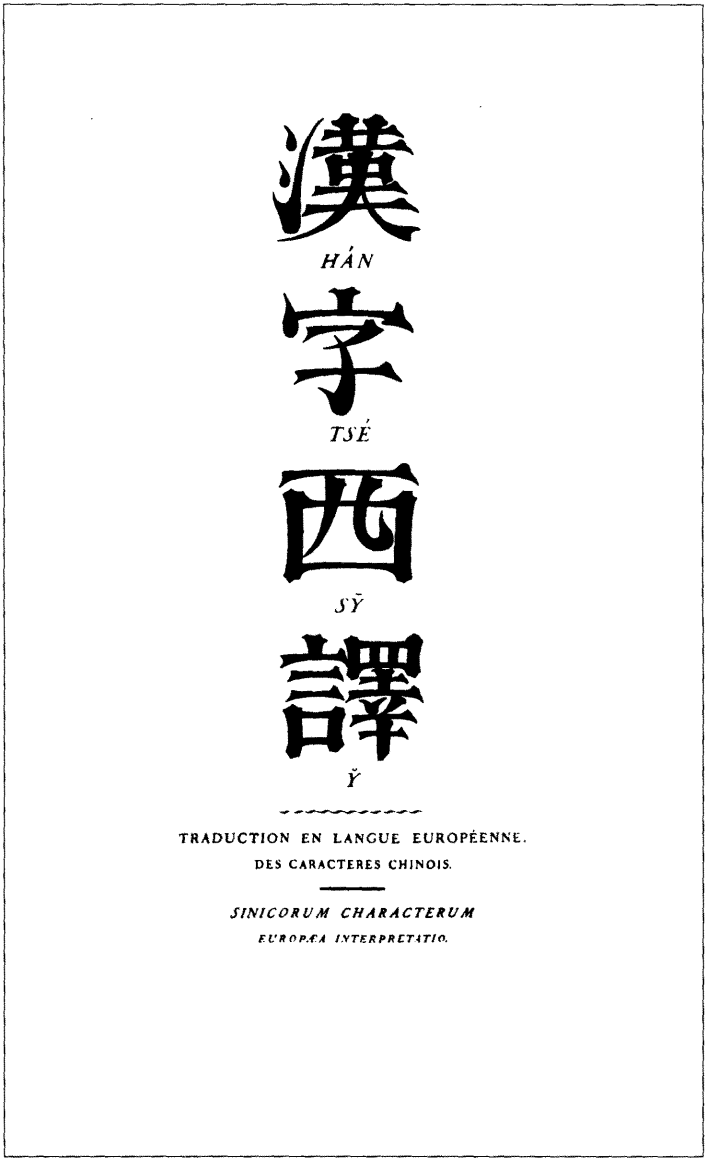
PAR M. DE GUIGNES, RÉSIDENT DE FRANCE À LA CHINE, ATTACHÉ AU MINISTÈRE DES RELATIONS EXTÉRIEURES, CORRESPONDANT DE LA PREMIÈRE ET DE LA TROISIÈME CLASSE DE L'INSTITUT.

A PARIS,

DE L'IMPRIMERIE IMPÉRIALE.

M. DCCC. XIII.

図版1　ギューニュの《中仏羅辞典》、1813年刊、中表紙。東洋文庫所蔵



図版 2　《中仏羅辞典》の漢字タイトル。(前掲東洋文庫所蔵刊本の中表紙の次頁)。

る（→**図版2**）。緒言と序説及び漢字の筆順の紹介ののち、漢字の羅訳と仏訳が214部首の分類に従って配列されている。これに加えて主要な数詞と姓名が示され、さらに発音別の漢字配列をもって巻を閉じている。

ギーニュはその緒言に言う、近年わがもとにラングレス氏（Langlès）がポルトガルより三冊の本をもたらした。すなわち“Basile de Glemona”なる者の《*Dictionnaire latin et chinois*》、某宣教師の手になる《*Dictionnaire portugais et latin*》、フルモン氏（Fourmont）の《*Dictionnaire chinois et latin*》であると。緒言につづく序説においてかれはさらに三冊の中国字書を紹介している。それは《*Tching-tse-tong*》《*Tse-oey*》《*Tchouen-tse-oey*》であると言うが、これらはすなわち『正字通』『字彙』『續字彙』の諸字書のことであろう。

この緒言ならびに序説によれば、ギーニュはこれらの諸書を参照して辞書を編纂したかのごとくみえる。しかし事実は“Basile de Glemona”なるもののラテン訳辞書の稿本をそっくり借用して、自らはこれにフランス語訳のみを付け足して上梓したものにすぎないらしい。すなわちギーニュが刊行したこのナポレオン欽定版は一種の剽竊書であったのだ。

ところでギーニュにこの稿本をもたらしたというラングレス（Louis Mathieu Langlès, 1763-1824）はパリの東洋語学校（Ecole Spéciale des Langues Orientales Vivantes）の創立を提唱し、その実現（1796年）に当たっては校長となって中国学・東洋学の進展を援助した人物である。そのラングレスがもたらしたというもう一冊の書、フルモン氏の《中羅辞典》なるものもまた実際は無名の中国人〝黄〟某の遺稿ならびにスペイン宣教師バロ（Francisco Varo）の著の剽竊であったらしい。

漢字の欧訳辞典はすでに17世紀から有名無名の人物によって手がけられたようである。フランス・イエズス会士トリゴー（Nicola Trigault）の《*Si jou eul mou tse*》（西儒耳目資）は1620年（→Cordier, 1826？）に印刷された（→もっともこれは漢語の語彙でなく発音や音節を紹介したものである）。ポルトガル・イエズス会士セメド（Alvalez de Semedo, 1585-1658）もま

た辞書作成を企てたが、これはセメドの死によって刊行までに至らずに中断された。セメドは漢名を謝務禄、あるいは魯徳照といい、1613年に南京に入り広東で没した。イタリア語で書いた《シナ帝国史》(*Imperio de la China*, 1642年刊)ではじめて若干の漢字を原形のまま紹介している。宣教師のなかにはこのほかにも幾たりかの無名の者が同様の試みに挑んだと思われる。

18世紀にはたとえば上記フルモンの《*Linguae Sinarum mandarinicae hieroglyphicae grammatica duplex*》が1742年に完本として現れたが、これは上記のごとく剽竊の書であったといわれる。すなわち実際は無名の人物が刻苦して作した草稿が存在していたのである。思うに文化の実質は幾たりもの隠れた人物によってひそやかに作りあげられているのである。歴史の底流は実はその半ばが世間匿行の士に負うものであることを実感させられる。

ギーニュの辞書の原本を作った Basile de Glemona(バシーレ・デ・グレモーナ)は、イタリア人フランシスコ会修道士であった。おそらくこの修道士が苦心して作った中羅辞典の、その底本こそがギーニュがその緒言にあげている『正字通』や『字彙』などの諸書であったろう。ギーニュ自身がそのフランス語訳を補筆する際にこれら中国字書の原本を参勘したか否かは確認されない。

ちなみに《*Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*》(19世紀ラルース百科事典)の序文には、事典編纂の際にシナ関係で参照したという中国辞書に《*Paï-wen-yun-fou*》の名があがっている。言うところの『佩文韻府』は当時ヨーロッパ全体でも3部程しか見ることのできない稀本であったらしい。だがこれがいかなる辞書であるかというその説明はかなり怪しいもので、この序文の筆者がはたして実際にこの『佩文韻府』を実見していたか否かはすこぶる疑わしい。

余論ではあるがこのギーニュに中国語を教えた父ギーニュは、フン族(Huns)と突厥(Turcs)の起源に関する論考があり、フンすなわち匈奴であるとの説を立てた学者であるが、さらに《*Mémoire dans lequel on prouve quelques Chinois sont une colonie Egyptienne*》なる小著がある。これはタイトルが示すように、中国人の一部はエジプト人の末裔であるという

奇説を主張した論文である。ヒエログリフと漢字のいささかの相似があるいはこういう着想を抱かせたのかも知れない。この小著もいまや天下の稀覯本であるので、わたくしはその中表紙の写真を掲げておいた（→**図版3**）。

中国人がエジプトの植民であるという説は、17世紀のドイツ・イエズス会士キルヘル（A. Kircher, 1601-1680）が唱えたものである。エジプトのヒエログリフを判読した一人であるキルヘルの著《シナ図説》では、ノアの子孫がエジプト人を率いてシナに渡来し、エジプト文字を伝えたことになっている。フランスではこの説をめぐる論争がアカデミーを巻き込んで、このギーニュの頃まで継続していたのである（→これについては後藤末雄『中国思想のフランス西漸』第六篇三「エジプト人中國植民説」の提唱）。

ギーニュの辞書は剽竊であったとはいえ、しかしこれは漢字の欧訳辞典の完本としてはもっとも早期のものである。その後にクラプロート（A. H. Klaproth）、レミュザ（C. F. M. Rémusat）、ポティエ（J. P. G. Pauthier）などの刪定補筆を経て（→ Cordier, pp. 1589-1592）、この辞書がヨーロッパの多くのシノローグに裨益すること甚大であったこともまた否定し得ない事実である（→ A. Rémusat の《*Mélanges Asiatiques*, t. 2, 1826》所収の「Sur le supplément au dictionnaire chinois-latin du P. Basile, rédigé par M. Klaproth」及び「Plan d'un dictionnaire chinois」をも参照せよ）。別稿で述べる予定のジュディット・ゴーチェもまたこの辞書を用いて彼女の中国詩訳詩集《*Livre de Jade*》を著している。

さてデルヴェが用いた辞書のつぎに“Medhurst”とあるのは、イギリスの宣教師メドハースト（Walter Henry Medhurst, 1796-1857）であり、その辞書とは《*Chinese and English Dictionary*》であろう。これは1842年からその翌年にかけ2巻の辞書としてバタヴィア（→オランダ領時代のジャカルタ）において刊行された（→**図版4**）。

メドハーストはプロテスタント布教会によってインドに派遣され、1822年にバタヴィアに着き、マレーシアにおいて福音書を説いた。マレー語のみならず中国語、ジャワ語、日本語にも熟達した。1836年にいったん帰国し、2年後にふたたび出立して1843年に上海に居住した。かれは一時日本に渡ろう

MEMOIRE

DANS LEQUEL ON PROUVE,

QUE LES CHINOIS

SONT UNE COLONIE

EGYPTIENNE,

Lû dans l'Aſſemblée publique de l'Académie Royale des Inſcriptions & Belles-Lettres, le 14. Novembre 1758. Avec un Précis du Mémoire de M. l'Abbé BARTHELEMY, ſur les Lettres Phéniciennes; lû dans l'Aſſemblée publique de la méme Académie le 12. Avril 1758.

Par M. DE GUIGNES, de l'Académie Royale des Inſcriptions & Belles Lettres, Profeſſeur au Collége Royal de France en Langue Syriaque, Cenſeur Royal, Interprète du Roi pour les Langues Orientales, & Membre de la Société Royale de Londres.

NOUVELLE ÉDITION.

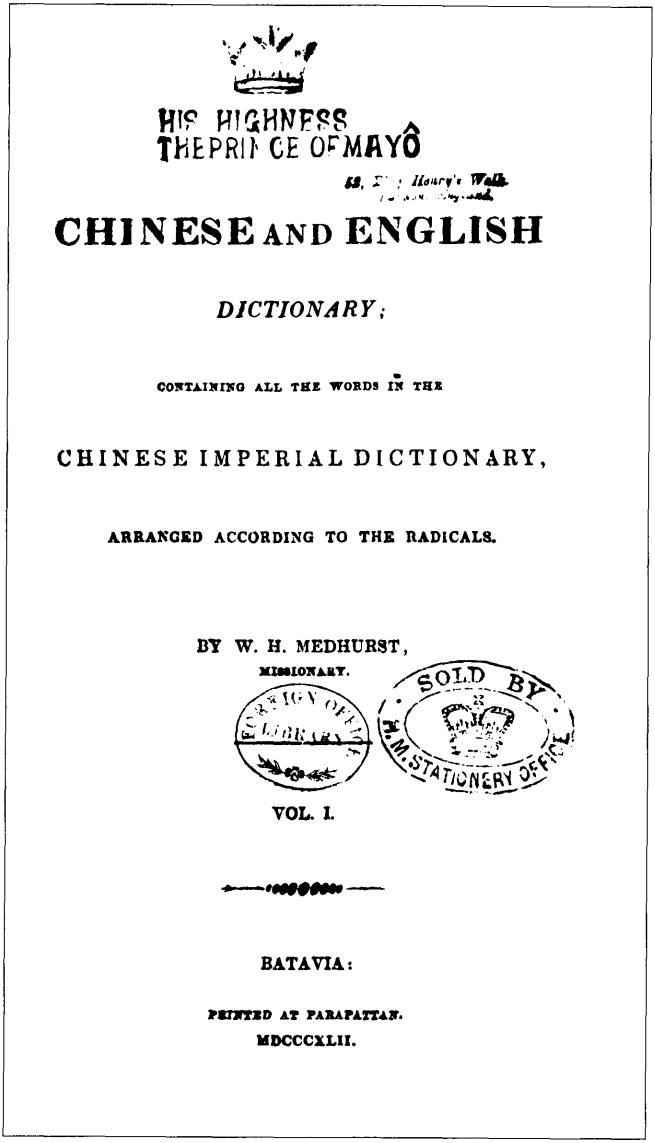
A PARIS,

Chez DESAINT & SAILLANT, rue S. Jean de Beauvais, vis-à-vis le Collége.

M. DCC. LX.

Avec Approbation & Privilége du Roi.

図版3　ギューニュ父《シナ人のエジプト起源考》1760年刊。東洋文庫所蔵。



図版4　メドハースト《漢英辞典》バタヴィア版。1842年刊。東洋文庫所蔵。

としたが果たすことができなかった。道光年間に広東に移り、新約聖書などの漢訳に従事した。漢名を“麦都思”といい、筆名を“Philo-Sinensis”という。“シナ愛好の士”という意である。メドハーストは科挙制度を讃美してヨーロッパへの導入を主張した一人である。中国の教育制度や試験制度の導入はすでにケネー（François Quesnay, 1694-1774）が熱烈に主張していたことで、フランスの競争試験の起源はこの科挙制度にあると言われている。

この漢英辞典の対をなす英漢辞典《*English and Chinese Dictionary*》(2 vol. 1847-1848）があるほか、主著として以下のものがある。

《*Comparative vocabulary of the Chinese, Corean and Japanese languages*》Batavia, 1835

《*China, its states and prospects*》Londres, 1838.

《*An English and Japanese and Japanese and English vocabulary*》, 3 vol. 1839

《*Chinese miscellanies*》Shang-haï, 3 vol. 1848-1853.

つぎに“Morrison”とあるのは、モリソン（Robert Morrison, 1782-1834）であり、その辞書とは無論《*A Dictionary of the Chinese Language*》であろう。これは全6巻の大著であり、その「Part I」は東インド会社によって印刷されて1815年に刊行、「Part III」は英漢辞書を含んでおり1823年に完結した（→内容詳細はCordier, pp. 1592-93を見よ。またA. Rémusatの《*Mélanges asiatiques*》所収の「Examen du dictionnaire chinois de M. Morrisson」をも見よ）。

モリソンは漢名を馬礼遜（Ma Li-suen）という。イギリスの長老派教会（presbyterianism）の宣教師である。長老派というのは宗教改革者カルヴァンのプロテスタンティズムがイギリス、とりわけスコットランドに根を下ろしたものである。1807年（嘉慶12年）にマカオに赴いたモリソンは、中国に滞在した最初のプロテスタント牧師としてこの派の中国宣教の基礎を築いた。

すでにゴスポート（Gosport)において中国人より中国語を学んでいたか

れは、2年足らずでこれに精通したという。1815年までイギリス東インド会社の翻訳官を務め、1820（1818？）年にはロンドン伝道協会（London Missionary Society）がかれの協力者として派遣した宣教師ミルン（W. Milne、漢名は米憐）ともにマラッカに英華学堂（Anglo-Chinese College）を開設し、プロテスタント伝道の機関とした。（→この英華学堂はその後J．レッグが校長をしていた1843年に香港に移された）。当時の清朝ではヨーロッパ人との往来教習が厳禁され、東インド会社も貿易阻害をおそれてこの禁令に従っていた。そこでかれの直接の任務は伝道よりも英漢辞書の編纂および聖書の華訳にあった。モリソンはミルンとともに『新約聖書』の全訳（1813年）、及び『旧約聖書』の完訳をもなした（1819年）。そしてイギリス外交官ネーピアの使節として北京にも行ったが、ネーピアと同じく重症性のマラリアに罹り、広東で没した。ほかに以下の著書がある。

《*A Grammar of the Chinese Language*》, 1815.（→ Cordier, p. 1661）
《*A View of China for philological purposes*》, 1817.
《*Horae Sinicae*》, 1824.
《*Chinese miscellany, with translations and philological remarks*》. 1825.
《*Vocabulary of the Canton dialect*》, 1828.

わが国の天保8年、1837年に起きた「モリソン号事件」は、このモリソンとは関わりがないのであるが、かれの名が当時すでに日本でも知られていたことを示している。すなわち商会員、医師、あるいはS. W. ウィリアムズ（衛三畏）などの宣教師を同乗して浦賀に来航したアメリカ船を幕府が砲撃して退去せしめた事件であるが、渡邊崋山、高野長英などはこれを中国学者モリソンの渡来と誤解した。そしてこの著名の人物を敵として逐攘することの非を、崋山はその『慎機論』において、長英はまた『戊戌夢物語』においてモリソンの人柄をも説いて直言した。幕府が両者を処罰したいわゆる「蛮社の獄」は、その後の開国にいたる動きに大きな影響を与えたのであるから、誤解によるとはいえモリソンは間接的にわが国の歴史にもまた関与したとい

うべきである。

このモリソンはまた“George Ernest Morrison”（1862-1920年）とも混同されてはならない。G. E. モリソンはオーストラリア生まれの新聞記者であり、「ロンドン・タイムズ」所属の記者として北京にも駐在した。その中国駐在中には精力的に極東関係の洋書文献を蒐集し、これがのちに岩崎久弥によって購入され（1917年）、モリソン文庫として現在の東洋文庫設立の基礎をなしたことはここに贅言を要しない。

さてデルヴェの訳注にあらわれるもう一人の“Bridgman”は、アメリカの宣教師ブリジマン（Elijah Coleman Bridgman, 1801-1861年）である。漢名を裨治文という。中国に派遣されたブリジマンは、やはり広東に赴いて（1830年）布教活動をおこなった。中国語はモリソンについて学び、ドイツの宣教師ギュツラフ（K. F. A. Gützlaff）とともに「知識普及協会」（Society of the diffusion of useful knowledge）を設立した（1834年）。また「Chinese Repository」を創刊・編集して、中国事情を海外に伝えた。1847年以降は上海で聖書の漢訳に専念した。聖書の漢訳は中国に志したすべての宣教師の共通の野望であった。

ブリジマンには初めて広東方言をまとめて紹介した《*A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*》（1841年、マカオ刊）がある。これは身体・親族・商業・軍事・建築・農業・植物などとテーマ別に並べた選句集であるようだ。（→内容のほぼ半分はこれを印刷した前出S. Wells Williamsの執筆によるらしい。Cordier, p. 1684）。

そのほか『爾雅』（Eul Ya）、『小学』（Siao Hio）、『三字経』（San tseu king）、『千字文』（Ts'ien tseu wen）などに関する論稿があるが、デルヴェがこれらのいずれを参照したのか不詳である。

第二章

［1］デルヴェの李白略伝

さてわたくしは第一章の［2］において、デルヴェのアンソロジーの内容をなす詩人35名の名前の一覧を掲げておいた。ここに掲げられた唐代詩人の作品を、デルヴェはどのようなフランス語に移しているのであろうか？　この翻訳を検討することによって、なにか注目すべき比較文学的・文化的事実を見出すことができるであろうか？

この問いに答えるためには、まず翻訳されているしかじかの詩人のしかじかの詩編が、唐代詩人の夥しい作品のどれであるかを確定しなければならない。だが、これは前号でもすでに述べたことであるが、デルヴェの訳詩の大半はヨーロッパの読者が理解しやすいような、原題とはほど遠い意訳的タイトルを冠している。その例として先にあげた高適の5首のフランス語タイトルとその原題を見比べて欲しい。たとえば「Tristesse」なるタイトルを付したものの原題は「宗中十首其一」である。これをつきとめるには一応高適の全作品に目を通さなければならない。もしこうした同定作業を訳詩100編余のすべてにわたって行うとすれば、かなりの労力と時間が要求されるであろう。

そこでわたくしはここではとりあえず李白の翻訳のみに限定することにする。しかもそのなかの幾編かを選び、これを分析のサンプルとして取りあげたいと思う。

作品の翻訳の考察に入るまえに、まず紹介しておかねばならないことがある。それは詩編仏訳の冒頭に記述されたデルヴェによる6頁ほどの簡略な李白のビオグラフィーである。当時のかれには李白に関する伝記的事実がどの程度知られていたのであろうか。ここに李白略伝の大意を掲げておこうと思う。小見出しはわたくしが便宜的に付したものであり、（→　　）はわたくしの注記である。

李白の人気：Li-taï-pé という名を、本書を被読される諸士（→ヨーロッパの読者）はおそらくここではじめて目にされたことであろう。ところがこの名は中国では千年前からもっともポピュラーな名前である。文人の書斎のみならず庶民の家屋にも、また図書館の書棚や陋巷の板壁に、あるいは立派な彫像から茶飯の陶磁器の類にいたるまで、いたるところにこの名が刻まれているのを見ることができる。学生たちは李白の詩を吟誦し、田夫野人もまたこの詩人の歌謡を口ずさむのである。

生年と前半生：Li-taï-pé、略して Li-pé は、Sse-tchouen（→四川）において702年（→存疑）に生まれた。“taï-pé” の字義は“大なる輝き”ということで、母がかれを懐妊したおりに、未明の空に不思議に大きな輝きを発する星（→太白星＝金星）を見たので、それによって付けた異名である。

幼時より勉学に精励した李白は、若干20歳時には “docteur” の称号を得て（→存疑）、生地近郷ではすでに学問ならびに詩における第一の名を馳せていた。かれは首都に出て文人才子を厚遇するという “Ming-hoang”（→明皇＝玄宗）の庇護を得んものと、“Tien-pao”（→天寶）の初年、すなわち西紀742年に “Tchang-ngan”（→長安）への途に立った。依るべき手づるは、ただ燃えるような志とその名声のみであった。

推挙と出仕：当時シナの宮廷には Ho-tchi-tchang（→賀知章）という大臣（→？）がいた。かれはヴェルギリウスやオウィディウスなどの文人を庇護したことで有名なかのローマの政治家マエケナスに相当する人物である。李白はまずこの人物に会見した。みずからもまた才知文雅の人であった Ho-tchi-tchang は、たちまち李白の才能に魅せられた。そこで邸宅の一室を李白に提供して、ともに学問を語り風流の遊びをなした。日ならずしてかれはこの友人を Ming-hoang に推挙したのである。Ming-hoang もまた同様に李白の才能に魅せられた。皇帝はこの若い詩人のなかに、みずからの治世の栄光に数うべきもののひとつを見たのである。かくして李白は中国の歴代史上に比類のない帝の寵愛を受けることになる。

宮廷詩人として：アミオ師はその著《シナ著名人伝》のなかで、かなりの頁を李白のポルトレに当てている。これはアミオ師が閲読した李白の諸伝からみずから抄出したものである。はなはだ面白いので、これを借用して紹介したい。

「Ho-tchi-tchang は帝に言った、今わたくしの邸内にある人物が寄食しておりますが、これこそまこと前代未聞の大詩人でございます。ただこの男には癒し難い悪癖がございます。つまり大酒飲みで、酔うて泥のごときこと日にわたる有様です。とはいえその詩はきわまりなく見事なもので、まず陛下直々にこれをご覧下さいませ、と李白の詩稿を呈した。

帝は一読してその詩に魅惑された。“人にはおのおの欠点のあること朕もまた承知である。この詩の作者を召し出だせ。その酒癖を癒すこと、この朕とてもあるいは叶わぬかも知れぬが、この詩人を宮廷にかかえてみたいと思う。”

李白は即日謁見を許された。帝は宮廷のなかの文人たちが占める席（→翰林院）のひとつをかれに与えた。そして李白との談論にしごく満悦して、日を経ずして大いなる親愛の情を示されることとなった。帝は政務を終えた後のくつろいだ一時を “Theng-hiang-ting”（→沈香亭）なるところで、臣下たちとともに地位のへだてない歓談に過ごされる。音楽を好む帝は詩人に詩、とりわけ歌詞を作らしめ、これをかれらとともに唱歌されるのである。李白が作詩に耽っているときは、しばしば帝みずから書記の役を務めさえする。このような振る舞いは天子の尊位にあるまじきことと諫める廷臣も現れた。しかし帝は言う、“朕のかく為せること、かくの如き卓異の才子が相手であれば、却って朕の栄光を増すのみである”と。…」

李白がこのように皇帝から特別な待遇を受け、しかもそれが数年にわたって続いたことは、伝承された多くの逸話が明かしている。帝はさらに李白をして重要な政務上の地位に任ぜしめようとさえしたが、これは宮廷内の策謀によって阻まれた。この一件をアミオ師は以下のように語る。

長安追放：「当時宮廷にはKao-li-chĕ（→高力士）なる宦官がいた。その権勢の極まること大にして、大臣たちですら憚るほどであった。ただ李白ばかりはこれを鼻にもかけぬ風であった。ある時李白は "Theng-hiang-ting" において帝の相手をして過ごしていたが、履いている新調の靴が窮屈らしくいかにも辛そうな様子であった。そこで帝は宦官Kao-li-chĕに李白の靴を脱がせてやるよう命じた。李白は足を投げ出してKaoに靴を脱がしめた。Kaoは心中に深い屈辱を感じた。

李白に対する帝の寵愛が頂点に達したとき、その時こそまさにKaoにとっては復讐の好機到来であった。たまたま李白が作った抒情詩（→清平調詞）の数節が、帝の寵妃であるかの有名なYang-feï（→楊貴妃）——Taï-tsun（→太眞）の名でさらによく知られている——を風刺したものであるかのように解釈され得るのを武器にとって、妃（→実は当時はまだ貴妃に冊立されていなかった）の怒りを指嗾したのである。

妃を侮辱せんとする意図も、また一片の野心すらもなかった李白の心は、こうした嫌疑を受けて大いに動揺した。宮廷生活への嫌悪が漸々に生じ、ついにかれは帝に致仕を請うて宮廷へのすべての絆を断つことを決意した。帝は李白への親愛の変わらぬ証しとしてみずから着す衣服の一式を与えた。これは帝国に大きな功業のあった者のみに下される例外的な報奨であり、李白はこの名誉に加えてさらに千オンスの金を下賜されたのである。

さてその後の李白の行蔵をみてみると、かれがこうした殊遇に対する感謝を、心中に感じているほどには現実の行為として示さなかったように思われる。詩人にあってはしばしば、内面の心情的誠実がそのままつねに理知上の振る舞いとして外に現れるとは必ずしもかぎらない。いったん自由となった李白は帝国の各地を風まかせに放浪した。かれを引き留めるものといえば、酒への情熱のほかにはなかった。……」

後半生：アミオ師はかく述べている。だがまことに酒のみが李白の愛したものであったろうか？　酩酊はむしろ深い愁いを紛らわせる一時の糊塗ではなかったろうか？　かれの心中に纏わりついて離れない、そして

またかれの詩句の随所に表現されているところのあの漠とした不安や死への恐れ、それを忘却せんがためではなかったろうか？

李白の性格の根底にあるこの不安と憂愁の入り混じった心情は、同時に中国国民のそれでもある。李白の作品がかくも長きにわたって愛好され流行しているのも、この国民的性情との共鳴を考えればこそ驚くにあたらないのである。

さて李白が以後数年にわたって諸国放浪の生活を送っているとき、かって長安で知り合ったある貴顕（→永王璘）がかれを幕僚に迎えた。ところがこの人物はMing-hoangの治世末に起こった反乱（→安史の乱）の首謀者の一人であった。李白はかれを称讃する者たちの弁護があったにもかかわらず、共謀の嫌疑によって投獄された。この反乱への加担がはたして本心からのものであった否かは知らぬとして、とにかくこれは李白の詩人としての名声のプレスティージュがなかったら、死に値する事態であった。囚縛は危ういところで解かれた。宮廷はふたたびかれを呼び戻そうとさえした。李白自身もまたふたたび出仕を決意して首都に赴こうとしたが、その六十二才（→存疑）の年に死に襲われたのである。西紀763年（→存疑）のことであった。

李白の死：中国の人々が愛してやまないこの詩人の最期は、いかなるものであったろうか？　諸説紛々であるがその一説には言う。李白はKiang-nan（→江南）に住んでいた従兄弟（→存疑）のひとりでYang-ping（→陽冰）なる者の家において急病によって卒したと。そしてThang-tou（→当塗）の町近くの山麓に埋葬されたと。

またかれが終生固執した飲酒による逝去の説がある。それによれば李白はKiang-nan地方を船で旅していたときに、大酒を喫して酔狂のあまり船の縁に立ちつくし、足を踏みはずして溺死したと。この伝説がのちに以下のような物語（→今古奇観）に脚色されたのであるが、これにはパヴィ氏による以下の翻訳がある。

「……その夜は月が皓々として照り輝いていた。李太白は船上で夜食を取っていた。にわかに空中に妙なる楽の音が響いてだんだんに近づい

てきた。そして大江のなかほどに大きな渦が巻き起こったかと思うと、それは尾鰭をたてた大鯨であった。そして二人の童子が李白の前に現れ、手にかかげた旗で行く手を示していた。童子は仙界の使者であり、主の命で天界に戻るように李白を迎えに来たのである。船中の人々が驚いて眺めるなか鯨の背に乗った詩人はしだいに遠ざかっていった。美しい歌声にかこまれたその姿はやがて雲の彼方に消えていった。」(*Contes et Nouvelles*, traduits du chinois par Th. Pavie)。

シナの人々が "le Grand Docteur" (→大学士)、"le Prince de la poésie" (→詩王)、"l'Immortel qui aimait à boire" (→酒を愛した不朽の人) と呼ぶこの李白への敬愛は、ついにはその祠堂を建ててこれを祀っているほどである。

李白と杜甫：杜甫はこの李太白に匹敵する唯一の詩人であるが、かれ自身は李白を師匠とみなしていた。この二大詩人の全集を注釈したある高名な文人 (→?) は、その各々の功績を以下のように述べている。「李太白と杜甫とのいずれが勝れるかは、論ずべからざる問題である。両者それぞれの領分がある。二羽の鷲が大空高くそれぞれ異なった方向に翔んでいったとき、いずれがより高く飛翔したと言えるであろうか。」と。(以上大意)

デルヴェによるこの略伝の記述には、現代の李白研究の成果から見た場合、幾つかの箇所——わたくしが (→存疑) の注を付した箇所——において訂正が施されなければならない。

まず李白の生年について702年が701年に、没年については763年が762年と訂正されるであろう。そして逝去の年齢は61歳ではなく62歳と訂正されるであろう (→ただしごく最近に没年を763年とする説、逝去の年齢を63歳とする説が出ている。松浦友久『李白伝記論』327頁)。

またデルヴェは李白が20歳の折りに "docteur" の資格を得たと言っている ([Il...obtint le grade de docteur à vingt ans,...])。もしここに言う "docteur" が "進士" の意味であるとすれば、これも誤りであろう。李白は

一度も進士科の試験を受験しなかったし、生涯布衣の身分であった。

ちなみにこのことはA.ウェイリーが指摘するように、当時の中国の詩人たちのなかにあって伝記上きわめて注目すべき、李白の経歴の独特なところである。「李白は進士科の試験を受験しなかったし、また一度も正式な官職につくことのなかったただ一人の有名な作家であった。李白と同時代の詩人のうちもっともよく知られた十二名の生涯をみると、この試験を受験しなかったものは一人もいなかったことがわかる。」(→ Arther Waley; *The Poetry and Career of Li Po*, 1950年. 小川・栗山邦訳169頁)。玄宗の殊遇にもかかわらず、李白はいちども正式な官職に就くことがなかった。デルヴェの記述のなかに、李白は玄宗によって翰林院における“席”のひとつを与えられたというが、それも“待詔”すなわち正式な官職への詔勅を待っている身分にすぎなかったのである。

以上は明らかに誤りと認められる箇所である。そのほかさらにこの略伝記述には不確かな事実がいくつかある。デルヴェが述べるには「李白は20歳の頃にはすでに郷里において学問ならびに詩歌で第一級の名を誇っていた」という。これは多分アミオの記述(→後述)に拠ったものであろう。だが20歳頃までの李白の経歴は、きわめて漠然としていてまだ詳しく知られていない。少なくとも、この時期までの制作であると確認された李白の作品はわずか数編にすぎない。

たとえば清代の乾隆年間の学者王琦の作った李白年譜を閲すると(→『李太白全集』巻三十五)、20歳の年の李白は、宰相にもなったことがある当時有名な詩人蘇頲に自作の賦を見せて称讃の言葉(→「是子天才英特、少益以學、可比相如」)を得た、という事実を記載するのみである。

同じく年譜は、この頃のかれは戦国政治の策謀術を学び、撃剣を好んでひとかどの俠客を気取り、東巌子という変わり者とともに山に籠もって奇行にふけっていたことを記載する(→「喜縦横術、撃劍、為任俠、嘗手刃數人劍……」)。すなわち当時の李白は、無論有望な若者としてのある程度の学問や文名があったにせよ、むしろ任俠と奇行とによっていっそうその名を馳せていたかのようである。

こうしたことへの言及がデルヴェの記述にまったく欠けているのは、進士受験の件もふくめて、デルヴェが王琦のこの全集を見なかったことの証明になる。おそらくかれはアミオの記述、もしくはたんに『唐詩紀事』などが録する記事に拠ったにすぎないであろう。

李白はまだその生地すら確定されていない。デルヴェの時代頃までは伝統的に蜀（四川省）の青蓮郷（現在の江油県青蓮壩）であるとされてきた。じっさい今の四川省江油県の天宝山の麓にある“隴西院”は李白の旧居跡と伝えられ、青蓮郷には李白衣冠の墓ならびに太白祠がある（→中国人民美術出版社『詩人李白』）。

すでに李白の同時代の親類である“李陽冰”――デルヴェはこれを甥（neveu）というが正確には従父昆弟、すなわち父の甥（従叔）である――や友人の“魏顥”、あるいは遺児の一人“伯禽”が残したメモ（李白の死後55年を経ていた）などによる証言が伝えられていた。

しかし20世紀前半からの研究は、李白は西域の一部つまり現キルギス共和国のトクマック付近のスーイヤブ（碎葉）で生まれたか、もしくはスーイヤブから中国へ移り住んでくる途中で生まれたと推定する。そして少年時を四川で過ごした、というのである。

李白が口述したらしいこの伯禽なるもののメモには、李白の祖先は涼の武昭王に遡り、かれはその九代の子孫である、そして祖先は隋末に難にあって“碎葉”に竄されたとある。

もしこの“碎葉”なる場所が、あの三蔵法師玄奘の『大唐西域記』に出てくる「素葉水城」、すなわち「スーイアーブ Sūy-āb」と同じであるとすれば、李白胡人説の可能性も強くなる。素葉水城は長安から何千キロも離れた、チベット（吐蕃）よりもさらに西方の遠隔の場所である。『西域記』には「諸国の商胡雑居せり。……素葉以西に数十の孤城あり。城みな長を立て、たがいに命を禀けずといえども、みな突厥に役属せり。」とある。スーイアーブは中国・ジュンガリア・モンゴリアから西方へ向かう商業路の交差点であり、諸国商人の蝟集する地点であったという（→布目潮渢『唐と西域』東西文

明の交流2、134頁)。

もしこれが事実とすれば、李白の家系はこうした西域の商胡の一族に属していたか、もしくはその先祖がこの「突厥化した中国人」の一人であろうという推測が可能になる(詳しくは松浦氏前掲書36-81頁)。それにまたその祖先が「涼の武昭王に遡る」という李白自身の口述が真実であるとすれば、その家系は唐の王室とも近親の系譜につながることになるらしい。

しかしまた李白はその作品のなかで、先祖は隴西成紀(→甘粛省天水市西北)の出であり、漢代の名将李広の後裔であるとも言っている。いずれにせよ自己の家系を韜晦するこのロぶりには、李白になにかそれなりの理由があったと考えなければならない。ちなみに別稿においても紹介する予定であるが、ジュディット・ゴーチェに中国語を教えていた正体不明の中国人"Tin-Tun-Ling"は、かれもまた陝西の生れであったらしいが、自己の出所を青海近辺と吹聴していたという。

最近の研究、とりわけ中国本土の学界では、文化大革命後の約15年間において李白研究は杜甫研究以上の活発な流行を見せているという(→松浦友久『李白詩選』)。李白の出自経歴も少しずつ明らかにされていくことだろうが、しかしやはり李白はいまだに謎にみちた人物のようである。

李白が遺した詩編はおよそ一千首あり、これらの作品のクロノロジーはまだ完成されてはいない。しかしつぎつぎに新しい研究が出されている。そうした制作年代の研究の成果は、たとえば李白を玄宗に推挙したのが賀知章だけでなく複数の人物が関与していたこと、友人の道士呉筠が直接の推薦者であり、賀知章や玄宗の妹の玉眞公主、あるいは蘇頲などが間接の支持者であったことをさらに明確に証明する。ちなみにデルヴェは賀知章を大臣(ministre)と言っているが、官は礼部侍郎つまり礼部省の次官である。(→賀知章が比較されているマエケナスは、ローマの初代皇帝アウグストゥスの親友で文学美術を保護した。現在フランスにおける文化擁護活動"メセナ"Mécénatはこのマエケナスの名に因んでいる)。

李白の天才気質はまた生来の俠気と相俟って、人を驚かすような行為、ときには——高力士との脱靴のエピソードにも見られるような——人を人とも

思わぬ傍若無人の行為に走らせる。そしてかれのそうした幾多の奇行も、また一種の魅力をそなえたものであったに違いない。そこにいわゆる好事者によって粉飾された伝説の生ずるゆえんがある。とりわけその死についてはいくつかの伝説がまつわりついている。

李白の臨終に立ち会ったらしい李陽冰の序には「公又疾亟(きわま)りて」、すなわち病のはてに卒したとある。その病は過度の飲酒による腐脇疾であったろうともいわれる（→詹鍈や郭沫若『李白與杜甫』を見よ、また松浦氏『李白伝記論』を見よ）。

病死が事実であったにせよ、しかしその死がパヴィが仏訳した小説『今古奇観』が語るような伝説に飾られるのもしごく道理である。李白が水中に映った月をつかもうとして溺死したという捉月伝説もそのひとつであり、このような話はすでに中晩唐の頃からあったという。宋の詩人梅堯臣（1002-1060年）に次のような詩がある。

采石月下逢謫仙。　夜披錦袍坐釣船。
醉中愛月江底懸。　以手弄月身翻然。
不應暴落飢蛟涎。　便當騎鯨上青天。

『今古奇観』は明の抱甕老人（1633-1634年）が40編の小説を選したものであるが、その第六話「李謫仙」はたとえばこの梅聖兪などの詩が伝えるような話を小説的に脚色したものであろう。『今古奇観』は李白を極度にヒーロー化した稗史者流の李白伝で、いささか荒唐無稽な叙述が混じっているが、後に采石江一帯に捉月台、衣冠塚、太白楼といった遺跡ができたのは事実である。こうしたさまざまの伝説は一方、李白の詩人としての名誉に牢固たる証しをたてるものであろう。

ところでデルヴェの記述の末尾に「シナの人々が“大学士”le Grand Docteur、“詩王”le Prince de la poésie、“酒を愛した不朽の人”l'Immortel qui aimait à boire と呼ぶ李白……」とあるのは、パヴィ訳の《Le Poète Ly-Tai-Pe》に見える「李翰林、詩仙、酒仙」のフランス語訳をそのまま移

したのである。すなわち “Docteur” は（翰林）学士の意にすぎない。

『今古奇観』（*Kin kou ki kuan*）のパヴィ（Théodore Pavie, 1811-1896）による仏訳の正確なタイトルは《*Choix de Contes et Nouvelles*》で、1839年の刊行であり、原書40編のうちの6編を選んでいる。この翻訳についてもわたくしは稿を改めて触れることがあろうかと思う。この『今古奇観』からデルヴェが1885年にさらに新たに3編を選んで訳したことは前号において述べた。

［2］アミオの李白伝

さてデルヴェによる李白略伝の内容は、ほとんどが《シナ紀要集》第5巻に収録するアミオ師の叙述に拠っている。この《シナ紀要集》についてはすでに別稿で紹介し、その主なる執筆者がアミオおよびシボーであること、しかもアミオの執筆した論文がシボーのそれに倍することを述べた（→「シェニエと詩経」36, 41頁）。全16巻からなるこの《紀要集》にはフランスに留学した中国人 Kao（ko, →高類思）ならびに Poirot（ポアロ）なるものの論文も加わっている。とはいえやはり《*Mémoires concernant les Chinois*》（→邦語では《シナ論叢》）とも略称されるこの紀要集の大半は、まさにアミオの大事業であると言わなければならない。

アミオ（Jean Joseph Marie Amiot, Amyot と綴られることもある）は1718年にツーロンに生まれた。1749年に中国伝道に派遣されて翌年にマカオに到着、1751年から北京に居留した。そして乾隆の中期から終期までの40年を北京に送り、この北京において1793年に卒した（→《19世紀ラルース》などに1794年卒とあるのは誤りらしい）。漢名を銭徳明（Tsien Te-ming, Ts'ien Tö-ming）という。紀要集第15巻の巻頭には中国の画家の描くところのアミオ肖像を載せる（→アミオ伝の詳細は Camille de Rochemonteix ; *S. J., Joseph Amiot et les derniers survivants de la Mossion française à Pékin*, 1915年. を見よ）。

1724年にはシナ全土においてキリスト教の布教を禁止する雍正（Yong-Tcheng）帝の勅令が出された。つぎの乾隆（K'ien-Long）の時代も弾圧が

継続され、とりわけ1745年から1748年にかけては北京を例外として多くの教徒やイエズス会神父が虐殺された。1764年にはフランス本国でイエズス会が廃絶され、1773年には全面的に解散させられた。(→ Isabelle et J.-L. Vissière ; *Lettres édifiantes et curieuses de Chine par des missionnaires jésuites, 1702-1776*., 1979年. に載せる年譜などを見よ)。

布教のために派遣されたアミオをとりまく状況はかようなものであった。そこでかれの精力はもっぱら中国研究の執筆に費やされた。紀要集に収録する代表的な論文につぎのものがある。

《中国兵法考》Art militaire des Chinois, traduit en français, 1772.

《中国音楽考》De la musique des Chinois, tant anciens que modernes, 1780.

《孔子伝》Vie de koung-tsée, appelé vulgairement Confucius, le plus célèbre d'entre les Philosophes chinois, et le restaurateur de l'ancienne doctrine, 1786.

《満州語文典》Grammaire Tartare-mantchou, 1787.

紀要集とは別に《満仏辞典》*Dictionnaire Tartare-Mantchou françois, Composé d'après une Dictionnaire Mantchou-Chinois*, 1789-1790. がある。これは前出ラングレスによって刊行され、乾隆12年頃までの満州語のすべての単語を、当時の宮廷で用いられていた発音に依って収めているという。

デルヴェが李白略伝に借用した「シナ著名人伝」は、第3巻・第5巻・第8巻に分載されていて、その第5巻には唐の太宗などの皇帝や大臣、軍人などのほか杜甫、李白、白居易、韓愈、孟郊、賈島などの詩人の伝記を見ることができる。

さてこの「シナ著名人伝」の杜甫伝につづく65番目に李白の伝記が10頁ほどにわたって書かれている。そしてここにデルヴェの記述には漏れて省略され、しかもわたくしが書き留めておかねばならないと思う記述が存在する。

まず李白の生没に関して、アミオはその生地を「See-tchouen (→四川)

の Min-chan（→岷山）からほど遠くない Y-tcheou（→益州）である」としている。すなわち唐代に剣南道の中心であり綿城ともいわれた成都の近くであるというのであろう。アミオはその生年を記していないが、李白の没年を「西紀763年にあたる Tay-tsoung の初年」とし、享年を60歳としている。代宗初年は763年ではなく実は762年にあたるので、これから逆算すれば李白の生年はデルヴェが記したように702年になる。（数え年で逆算すれば701年となる）。またこれもデルヴェの記述にないのだが、李白の没した場所を「Tsai-ché-ki」、すなわち采石磯と言っている。

また「李白は "Ou-kiun" という当時すでに名声のあった文人とともに首都に赴き玄宗皇帝に近づこうとした」という記述が見える。"Ou-kiun" は呉筠のことであろう。"Ou-yun"と読むのが正しいであろうが、原文は誤植のようにも見えない。

デルヴェがみずからアミオ師の文から借用したというその引用文も、実はアミオの文そのままではない。アミオの18世紀風の文体が19世紀的文体にパラフレーズされているというのみではない。ここに一例をあげて両者の文体筆法を較べてみるのも面白いと思う。例は賀知章から李白推挙の弁を奏されたときの玄宗の返答である。

アミオの文：「L'Empereur lut ces vers & en fut charmé. Amenez-moi, dit-il, ce Ly-pê, je veux le voir, je fais conde∫cendre aux foible∫∫es de l'humanité ; je ferais tous mes efforts pour le corriger de ∫on vice, qu'il vienne.」

デルヴェの文：「L'empereur lut ces vers et en fut enthousiasmé. "Je sais, dit-il, condescendre aux faiblesses de l'humanité. Amenez-moi l'auteur de ces poésies ; je veux qu'il demeure à ma Cour, dussé-je ne pas réussir dans les efforts que je tenterai pour le corriger."」

アミオの端的で冷静な筆法に比して、デルヴェのそれには情緒的な陰翳がうかがわれる。かれの描く玄宗は人情味に富み、19世紀の博愛主義的気風あ

るいはデルヴェ自身の人柄を髣髴させるかのごときである。さらにここでもう一つ比較をしてみたいものがある。

アミオの文中に李白が宦官高力士に靴を脱がしめた場面のやや細かい描写がある。その大意はこうである。Tcheng-hiang-ting（→沈香亭）の苑内に玄宗とともにいた李白は、新調した靴がきつすぎていかにも窮屈そうであった。そこで玄宗は李白に気兼ねをせずともよいと言い、かたわらの高力士に李白の靴を脱ぐように命じた。高力士はすかさず李白の靴を脱いでやった。頭の中で詩句を按じてぶつぶつと反芻していた李白は、玄宗のこの過分の待遇に恐縮の辞意を返そうとしてあわてた。そこで素早い高の行為を阻む暇もなく、また高に謝辞の一語すら発する余裕もなかった。誇りを傷つけられた高力士はこれに憤り心中久しく恨みを抱くこととなった……。

いっぽう郭沫若が『李白与杜甫』のなかで紹介している唐人段成式の『酉陽雑俎』の描写はこうである。「玄宗は便殿へお召しになった。李白はいかにも精神高朗に、まるで霞のなかから現れるように悠然とやってきた。玄宗はおぼえず天子のご身分をも忘れて、李白を靴のまま昇殿させてしまった。李白は足を高力士の前へつきだして“脱げ”と言った。とっさのことに高力士はあわてて彼の靴を脱いだ。李白が殿上をさがるとき、玄宗はその後姿を指して高力士に言った“あの男はやっぱり貧乏くさい”。……」（→須田氏訳、90頁）

両者の描写のいずれがより説得的であろうか。アミオの文ではあわてたのは李白である。かれの念頭にはおそらく、天子の気まぐれによっていつ命ぜられる分からない、呈すべき詩句の推敲があった。かれはまさに“仙人”たるにふさわしく“うわの空の霞”のなかにいた。皇帝の命に間髪をいれずに応じた高力士の敏捷さは、いかにも巧偽に長けた宦官らしい振る舞いである。いっぽうの段成式の描写では、李白の行為も高力士の行為もいかにも不自然である。描かれた玄宗もいささか鷹揚さに欠け、“天子のご身分”とは径庭がある。『酉陽雑俎』は古今の蔵書や宮中の秘書などの話をもとにして書かれたという。とすれば事実はこちらの描写のほうが近いのかも知れぬ。しかし現実の場面としてやはりアミオの文に説得性がある。

高力士は宦官のうちもっとも寵愛されて権勢があった。唐代宦官の跋扈はかれに始まるといわれ、楊国忠、安禄山、高仙芝などもかれと結んではじめて勢力を得たといわれる。かれはのちに驃騎大将軍となり渤海郡公に封ぜられた。

この高力士に触れてアミオの文の下段には比較的長い注記（remarques）がある。今ここにその概要を紹介しておこう。アミオは言う、Si-ngan-fou（→西安府）近辺で発見されたキリスト教の寺院内（→アミオはその寺名を言わない）の石碑がある。その碑文に“Généraliſſime”（→大将軍の意であろう）の官位を冠して高力士の名が記されている。碑文は“Tien-pao-tchou”（→天宝初）――すなわち西紀742年であるが――の漢字をもってはじまり、玄宗に先立つ五代の皇帝（→高祖、太宗、高宗、中宗、叡宗）の肖像を玄宗が高力士に命じてこの寺院内に設置せしめた旨が記されている。

アミオが推測するに、これは玄宗が口実として置かしめた先代頌徳碑であり、かれは先祖への孝をおこなうと称してしばしばこの寺院を訪れ、異教の僧侶たちと歓談するのを好んだのであると。乱によっていったん首都を離れた玄宗は、Tché-te（→至徳）2年、西紀757年の12月にふたたび長安に戻って“Hing-king-koung”（→興慶宮、李白伝に見える沈香亭はこの宮内にあった）に入る。Sou-tſoung（→粛宗）に報じられた上奏書によると、玄宗（→上皇となっている）はこの興慶宮においても多数のキリスト教徒たち（→景教すなわちネストリウス派の教徒たちであろうがアミオはそう明言していない）を召し入れて、高力士を初めとする宦官たちや高官を陪して款語を楽しんだのである、と。

以上がアミオの注記の概要である。「西安府近辺で発見されたキリスト教の石碑」とは、“大秦景教流行中国碑”にほかならない。この碑石はかって長安西郊の景教（ネストリウス派キリスト教）寺院である大秦寺（波斯寺ともいった）に在ったもので、781年（唐の建中2年）に建てられたという。碑頌並びに序は、大秦寺の僧“景浄”なるものの述による。“景浄”は別にシリア語で“雲丹の法王大徳僧アダム”と記されている。碑文の内容は、ネストリウス派キリスト教（Nestorianisme）が唐の太宗の頃（7世紀中葉）

はじめて中国に将来され、この碑の建設されるにいたるまでの約150年間の流行の経緯を述べたもので、漢文と若干のシリア語をもって刻まれている。当時における東西文明の交流、とりわけ長安文明とキリスト教・回教との交流を示す重要な歴史資料である（→詳しくは佐伯好郎著『景教碑文研究』、明治44年）。

ところがこの大秦寺は845年、会昌の廃仏によって廃滅され、碑石は以後およそ780年ものあいだ土中に埋没していた。ようやく明朝末の1625年頃、大秦寺跡の空地に移転していた金勝寺なる庭内に偶然に発見されたのであった。発掘と同時にこの碑石は、当然ながらヨーロッパ各国の宣教師やシノローグの耳目を集めた。

碑石はさっそく当時中国に在留していたトリゴー（Nicolas Trigault, 金尼閣）などが実見した。そしてその一部がラテン語訳され、同じく浙江省にいたディアス（Emmanuel Diaz, 陽瑪諾）によりその拓本を載した『唐景教碑頌正詮』（漢文による解釈）が出版された（1644年）。いちはやくヨーロッパに伝えたのは、はるばる長安にまで赴いてみずからこの古碑を就見したセメド（Alvarez de Semedo, 魯徳照）によるポルトガル語訳であり、さらにボイム（Michael Boym, 卜爾格）が新訳を試み、1678年にはローマ大学教授キルハー（Athanasius Kircher）によりアムステルダムにおいて碑文全文が翻訳出版された（以上についてはコルディエの『書誌』、桑原隲藏『西安府の大秦景教流行中国碑』[藝友一ノ一]、佐伯好郎『景教文獻及遺物目録』などを参照されたい）。

アミオの注記もまたこのキルハーの訳に及んでいる。碑文原文を閲するとたしかに高力士の名が後半あたりに現れる。原漢文では「天寶初令大将軍高力士送五聖寫真……」の件りである。景教碑文に触れたアミオのこの注記は、しかしながら本論のテーマから逸れるものである。以下の【付記１】において、わたくしはその若干を言及するにとどめる。

次にわたくしは冒頭に述べたようにデルヴェによる李白詩の仏訳の考察に入りたい。李白詩のポエジー（詩的価値）を構成する諸要素のうちのどのよ

うな側面がデルヴェのフランス語のうちに汲み取られているであろうか、あるいは遺漏しているであろうか？　そこに転移され得たもの、もしくは転移され得なかった要素は何であろうか？　ここではふたつの異なる文化的意識ないし無意識がどのような接触・交換の内的現象を引き起こしているであろうか？　このようなことを念頭において、わたくしはデルヴェの翻訳を検討していきたいと思う。以下次稿。

【注記１】『大秦景教流行中国碑』のアミオの記述に関わる部分の原漢文を、わたくしは以下に仮りの訓読を施して示しておきたい。

「天寶の初め、大將軍高力士をして五聖の寫真を送り、寺内に安置し、絹百匹を賜いて、睿圖を奉慶せしむ。龍髯遠しと雖も、弓劍攀ずべし。日角光を舒ばし、天顔咫尺なり。三載、大秦国なる増佶和、星を瞻ぎて化に向い、日を望んで尊に朝ゆ。僧首羅含僧普論等十七人に詔して、大徳佶和とともに興慶宮において功徳を修めしむ。是に於いて天題の寺牓あり、額載の能書あり。……」

高力士が五聖（アミオはこの五聖を高祖・太宗・高宗・中宗・叡宗というが異説がある）の肖像を寺内に安置した年、すなわち“tien-pau-tchou”（→天寶初）の年代については、天寶６年とも７年とも言われているがアミオはこれを字義通りに解しているようである。細かい疑問点は別として、かれの推測――玄宗が興慶宮において多数の景教僧侶信徒たちをしばしば親しく接見していたのではないかという――推測は、以上の碑文内容によって得たもののように思われる。

【注記２】掲載した図版４枚は、いずれも財団法人東洋文庫の許可を得たものである。